

大学生の自己主張と自己の発達

鶴川女子短期大学

佐藤淑子

Assertion and Development of Self

Tsurukawa Women's Junior College

SATO, Yoshiko

自己主張の発達の規定要因はまだ不明な点が多い。本研究では、自己主張の発達と自己認識のかかりについて探ろうとした。また、自己主張は自己主張の内容や主張する相手など、状況の諸条件によっても変動することが報告されている。あわせてその点についても検討した。被験者は日本人大学生、調査方法は質問紙調査であった。

自己主張の発達と自己認識の間には密接な関連が見出された。自己認識尺度の因子「自我の強さ」はプラスに、「不安・焦燥」、「他者依拠性」はマイナスに作用する。また、自己主張する対象によって主張するかどうか変動するタイプとしないタイプとでは「自我の強さ」「不安・焦燥」「他者依拠性」に有意差が見られた。なお、自己主張することを肯定的に捉えていることと自己認識との間には関連が見られなかった。

【キーワード】 自己主張, 自己認識, 大学生

This author explored relationship between assertion and the development of self-recognition. Research method was a questionnaire survey, and samples were Japanese university students. Four factors of self-recognition were "Anxiety", "Dependency", "Strong ego" and "Diligence". Positive correlation between "Strong ego" and assertion was found. Also negative correlations were found between "Anxiety", "Dependency" and assertion.

【Key words】 assertion, self-recognition, university students

問 題

自己主張トレーニングは1950年代に自己の考えや感情を表現することが苦手な人間関係上の問題を抱えた人を対象とするカウンセリングや臨床心理学の領域に端を発した。その後、主張性検査が開発されたが、その目的は主張訓練の対象者の主張性の程度を明らかにし、訓練計画立案の指針とすることや主張訓練法適用の効果を検討するための客観的用具として利用することにあった(古市ほか1991)。

1970年代から80年代にかけて自己主張は西洋の国々で一般の人々ののぞましいソーシャルスキル

を育むための有効な手段として発展した (Wilson & Gallois 1993)。80 年代には日本でも子どもの対人行動における自己制御機能のひとつの側面として、自己主張を子どもに育むことの大切さが提起され (柏木ほか 1986, 柏木 1988)、自己主張トレーニングに関する研究やその実践もすすめられてきている (平木 1989, 1993)。伝統的に日本では子どもに育む社会性の主眼点は集団の中での協調性や、他者のために自分を抑える自己抑制の側面におかれてきた。けれども近年、子どもの自発的で能動的な自己主張の側面も育むことの重要性が認識されるようになり、教育の現場や日常の対人関係の場面で少しずつ受け入れられるようになってきた。臨床心理の専門家による自己主張訓練法から離れて、家庭や学校、地域などの教育環境で自己主張を育むことに関する研究も多く報告されている。

幼児期、児童期、青年期、成人期、老年期の各発達段階において、自己主張は対人関係、社会性の発達とのかかわりにおいて、様々な視点から検討されてきている (Wilson & Gallois 1993, 濱口 1994, 古市 1995, 山本 1995, 佐藤 2001, 柴橋 2004, Wright 1983)。その自己主張の定義は、攻撃性を排除し、「他人の権利を侵害することなく、個人の思考と感情を、敵対的でないしかたで表現できる能力」という Deluty (1979) の定義に近いものが多い (濱口 1994)。

自己主張とパーソナリティの関連について焦点を当てた研究も重ねられてきた。欧米での先行研究において成人の主張性と性格特性の関連を調べた研究がいくつかあり、主張性の下位次元と性格特性との関係についても検討されてきている (柴橋 2004, P.11)。自己主張の高い人は自己主張の低い人に比べて自己信頼感、独自性、支配性が高く、顕在的不安が低いことなどが報告されている。日本でも古市ほかは、Galassi の主張性検査法に基づき、日本人大学生を被験者とする主張性検査法を開発されている (古市ほか 1990, 古市 1993)。自己評価が比較的高いことや社会的外向性と、自己主張の発達の間に関連が見られた (古市 1993)。

自己主張に関する研究が進むにつれて、パーソナリティや性格特性のようにある程度固定的で内的な条件だけではなく、自己主張をする状況、対象や内容などの変動的で外的な条件が個人の自己主張の程度に影響することが明らかになってきている。

主張性の内容 (下位次元) と性差について言及した報告から、児童期、思春期、成人期のいずれにおいても女性に、Positive Assertiveness (他者に対する肯定的な感情や考えの表明) の発達が優位で、男性に Negative Assertiveness (他者に対する否定的な感情や考えの表明) の発達が優位であることが見出された (Wilson & Gallois 1993, 古市 1993・1995, 柴橋 2004)。そして、親の性別しつけが女子学生の自己主張の発達に影響を与えることも見出された (佐藤 1997)。

この他にも、主張をする対象と自己主張の程度の間にも関係があることも示唆されてきた。たとえば、私的場面と公的場面での主張の程度の違いや (竹尾 2002)、自己主張する相手との関係を肯定的に認知しているかが自己主張に影響を与えること (埴 1999, 柴橋 2004 に引用) について検討したものがあ。また、自己主張は主張する側の性にも影響される。主張する側が女性である場合には主張する相手からも、また女性の主張行動を見ている周囲の人からも低い評価を受けることが多い (Wilson & Gallois 1993)。

自己主張を自己表明の側面から捉えた柴橋 (2004) は中学生・高校生を対象に、友人に率直に自分の気持ちや考えをなぜ言えたり言えなかったりするののかについて、様々な観点からいくつかの調査方

法を組み合わせで検討している。その結果、相互理解のためには自己主張が大切であるという価値観や、自分の率直な自己主張を受け止めてもらえた経験とそれに基づく友人への信頼感、自分の気持ちや考えを適切に言語化できるスキルなどの心理的側面が自己主張の発達と深く関わっていることを見出している。

しかしながら、山本(1995)が論ずるように自己主張と自己の発達のかかわりについてはまだわからないことも多い。たとえば、自己認識や自己意識と自己主張の発達はどうか関わっているのだろうか。ひとつには、自己認識は他者との相互交渉を通して形成され(内田 1989)、子どもは他者に対して自己主張を行なう中で次第に自己意識や自我を確立させるという見方がある。また、いかに自己を認識しているかがその人の行動、達成、適応の重要な決定因であることから(柏木 1988)、自己認識が他者との関わり方、主張的態度のありようを決定することも指摘されている。

そこで、本研究では、日本人大学生が、自己をどのように捉えているのかを性格特性よりもう少し広い意味で自己認識の観点から探り、自己主張行動と自己認識とのかかわりを検討する。また、自己主張の内容(下位カテゴリー)や、主張する対象によって自己主張はどう変動するのかについても検討する。

方 法

被験者： 都内の国公立大学及び私立女子大学の1年生 208名。その内訳は男子学生 64名、女子学生 144名。

調査時期： 2被験者 004年6月と11月。

調査手続き：通常の講義時間内に、一斉調査方式で上記調査票への回答を求めた。調査票への記名は求めていない。筆者が自分で調査を実施した時と、他大学の研究者の協力を得て、調査を実施した時がある。

質問紙の構成：

自己主張尺度

Galassi(1974)のThe College Self-Expression Scaleを元にし、主張性尺度を作成した。Galassiの主張項目には、ルームメイトとの関わりや、異性との付き合い方など、日本の実情にそぐわないものもあるので、それらを除外し、できるだけ一般的な質問項目を選別し、それらの質問項目を日本語に翻訳した。その内容は、Galassi にならって、Positive Assertiveness(他者に対する肯定的な感情や考えの表明)、Negative Assertiveness(他者に対する否定的な感情や考えの表明)、Self-Denial(自己否定、劣等感)の3つに分けることができたようにした。3つの下位カテゴリーの内容を表1に示した。なお、下位カテゴリーの評定の方向を自己主張できる傾向にそろえるため、自己否定の表現の項目は逆転し、これ以後、尺度をSelf-Affirmation(自己肯定)とする。

また、自己主張をする対象が親・友人・一般・権威の4つのカテゴリーを網羅するよう配慮し、20項目を選び出した。まず、各項目にあらわされた主張行動が自分に多いか少ないかを「よくあ

る」「多い方」「少ないほう」「ほとんどない」の 4 段階で回答してもらい、次に自分に主張行動が多かったり少なかったりすることを自分でどう捉えているかを、「とてもよい」「ややよい」「あまりよくない」「よくない」の 4 段階で回答を求めた。なお、自己主張全項目の平均値を自己主張尺度得点とする。

自己認識尺度

柏木ほか(2003)の「個人としての自己実現」を図る尺度と、梶田(1988)の「自己成長性」の尺度から、因子負荷量が高いものや自己認識の発達を図る上で重要と思われる項目を 26 項目選別した。回答は「あてはまる」「わりとあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」までの 4 段階の自己評定である。

表 1 Galassi の自己主張項目の下位カテゴリー

Positive Assertiveness	愛情や好意, 賞賛や支持, 意見の一致の表明
Negative Assertiveness	もっともな怒り, 意見の不一致, 不満や困惑の表明
Self - Denial	やたら謝る態度, 強い対人不安, 過剰な他者への気遣い

結果と考察

1) 己主張尺度

各自己主張項目の Galassi の下位尺度による分類や自己主張の対象による分類を表 2 に示した。質問紙は 20 項目で作成したが、「親しい友人の悪口を言う親に反論する」という項目については実際にはそのような状況がないという回答が多く欠損値が多くなったので、除外し 19 項目となった。

表 2 自己主張尺度の項目とその分類

番号	項目	対象	下位分類
1	お店などで順番を待って列に並んでいて横入りする人がいる時、自分が先に並んでいることをその人に伝える。	一般	Negative
2	もし両親に対して何か怒っている場合、自分の思いを話す。	親	Negative
3*	友人に千円を貸したが、その友人がそのことを忘れていたような場合、催促しない。	友人	Negative
5	友人に不当な非難をされたら、その場で言い返す。	友人	Negative
6*	友人に頼みごとがあってもなかなか切り出しにくい。	友人	Positive
7*	自分の意見はあまり言わない。	一般	Self-Affirmation
8	授業中、少人数のクラスであれば、先生の意見に疑問があるときには質問する。	権威	Self-Affirmation
9*	他の人をほめたり称賛したりすることは苦手である。	一般	Positive
10	もし友人があなたのために何か用事をしてくれたらお礼をきちんと言う。	友人	Positive
11	友人の幸運についてとても良かったなと思っている場合、その人に自分の気持ちを伝える。	友人	Positive
12*	人の気持ちを傷つけないように非常に気を使う。	一般	Self-Affirmation
13	もし勉強したいときに友人たちが訪ねてきたら、別の日にしてくれるよう伝える。	友人	Negative
14	自分の方が先に並んでいるのに、お店の人が他のお客にまず対応した場合、自分が先であることを告げる。	一般	Negative
15	もしあなたの両親が、すでに大切な用事が入っている週末に帰ってきてほしい(家にいてほしい)といったら、自分の優先したいことを告げる。	親	Negative
16*	相手は冗談で言っているつもりらしいが、自分にはかなり気に障る言葉であっても何も言わない。	一般	Negative
17*	授業中、目立つのがいやなので先生に質問しない。	権威	Self-Affirmation
18	クラス討論で自分の意見や持っている情報を隠せずに発言する。	一般	Self-Affirmation
19	あなたの尊敬する人が自分と全く違う意見を表した時、思い切って自分の見方を話す。	権威	Negative
20	もし友人があまりにも理不尽な頼み事を自分にしてきた場合はことわる。	友人	Negative

*逆転項目

自己主張尺度得点の分布を示すヒストグラムを図 1 に示した。19 項目の平均値は 2.64, SD は .363 である。最大値は 3.53, 最小値は 1.79 であった。

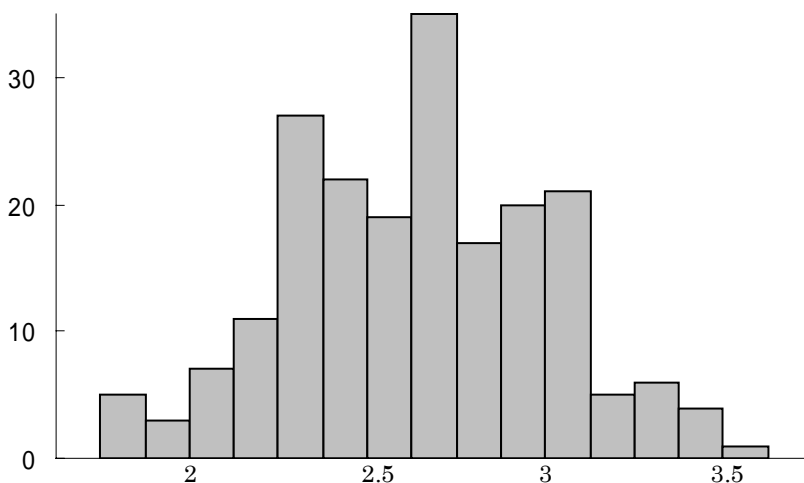


図1 自己主張尺度得点のヒストグラム

2) 自己主張尺度の対象，下位カテゴリーの相互相関

問題のところで述べたように，自己主張尺度の項目は，主張する対象を「一般」「親」「友人」「権威」に分けることが可能であるように構成されている。また，自己主張尺度の項目の内容により Positive Assertiveness, Negative Assertiveness, Self-Affirmation の下位カテゴリーに分けることが可能である。その相互相関を表 3 に示した。ここで，「親」を対象とする自己主張と「権威」を対象とする自己主張の間には相関が見られない。これは竹尾の研究で私的場面の自己主張と，公的場面の対象への自己主張に違いが見られたことと一致する。それ以外の対象間ではいずれも正の相関が見られる。また，自己主張尺度の下位カテゴリー間の相互相関では，いずれも有意な正の相関が見られる。

表3 自己主張尺度下位カテゴリー・対象の相互相関

	一般	親	友人	権威	P	N	SA
一般	1	0.177 *	0.444 ***	0.570 ***	0.343 ***	0.710 ***	0.771 ***
親	0.177 *	1	0.206 **	0.087	0.170 *	0.473 ***	0.112
友人	0.444 ***	0.206 **	1	0.398 ***	0.571 ***	0.693 ***	0.413 ***
権威	0.570 ***	0.087	0.398 ***	1	0.255 ***	0.497 ***	0.867 ***
P	0.343 ***	0.170 *	0.571 ***	0.255 ***	1	0.148 *	0.263 ***
N	0.710 ***	0.473 ***	0.693 ***	0.497 ***	0.148 *	1	0.491 ***
SA	0.771 ***	0.112	0.413 ***	0.867 ***	0.263 ***	0.491 ***	1

上段：相関係数

*p<.05, **p<.01, ***p.001

下段：有意確率

3) 主張尺度の対象別，カテゴリー別の比較

自己主張の下位カテゴリーと対象別の平均値と SD を表 4 に示した。下位カテゴリーでは Positive Assertiveness が Negative Assertiveness に比べて高い。肯定的な自己主張のほうが否定的な自己主張に比べてしやすい傾向が見られる (表 4 参照)。

表4 自己主張尺度下位カテゴリー・対象別の平均値

	平均値	標準偏差
Positive Assertiveness	3.25	.47
Negative Assertiveness	2.56	.39
Self-Affirmation	2.31	.66
一般	2.29	.47
親	3.10	.62
友人	2.99	.35
権威	2.32	.76

対象別の平均値は「親」や「友人」への自己主張が「一般」や「権威」と比べて高くなっている。これはより心理的距離が近い対象に自己主張しやすいからであると思われる。

4) 自己主張の対象と下位カテゴリーの性差分析

被験者は現時点では男子学生が 64 名，女子学生が 143 名である。そこで女子学生の被験者から 64 名をランダムサンプリングし，男子学生 64 名，女子学生 64 名を対象に性差分析を行なった。

表 5 に示したように，自己主張得点の平均値に有意差は見られなかった。次に自己主張の対象について男女に違いがないか分析したところ，対象については権威に 5%水準で有意差が見られた。男性のほうが権威に対して自己主張する傾向が高い。

また，自己主張の下位カテゴリーでの分析をした結果，女性のほうが相手への肯定的な気持ちの表明である Positive Assertiveness の平均値が 5%水準で有意に高いことが明らかになった。これは先行研究の報告と一致する(Wilson & Gallois1993，古市 1993・1995，柴橋 2004)。

表5 自己主張の対象と下位カテゴリーの性差分析

	男性 64名	女性 64名	t 値
一般	2.31	2.28	.295
親	3.02	3.12	-.909
友人	2.90	2.98	-1.331
権威	2.53	> 2.24	2.202 *
Positive Assertiveness	3.07	< 3.26	-2.169 *
Negative Assertiveness	2.56	2.54	.286
Self-Affirmation	2.42	2.26	1.301

*p.05

5) 主張する対象による主張の変動と自己主張のタイプ

先に述べたように対象別の平均値は親や友人への自己主張が一般や権威と比べて高くなっている。自己主張の対象別の平均値のデータから次のような自己主張のタイプを検討した。親・友人への主張と一般・権威への主張がともに平均以下である人を「Aタイプ:どの対象に対してもあまり主張しない」，親・友人への主張得点は平均以下であるが一般・権威への主張が平均以上である人を「Bタイプ:一般・権威により主張する」，親・友人への主張は平均以上であるが一般・権威への主張は平均以下である人を「Cタイプ:親・友人により主張する」，親・友人への主張と一般・権威への主張がともに平均以上である人を「Dタイプ:対象が誰であっても主張する」とする4タイプを抽出した(表6参照)。対象によって自己主張が変動するBタイプ(59名)とCタイプ(61名)は，変動しないAタイプ(29名)とDタイプ(29名)の倍近い割合になっている。この4つのタイプにカテゴライズされない被験者は24名であった。

表 6 自己主張のタイプ

A タイプ	どの対象に対してもあまり主張しない
B タイプ	一般・権威により主張する
C タイプ	親・友人により主張する
D タイプ	対象が誰であっても主張する

6) 自己主張の高低と下位カテゴリー・対象別比較

被験者を自己主張尺度の得点により、「自己主張高群」「自己主張中群」「自己主張低群」に 3 群化した。各群の内訳は「低群」が 62 名、「中群」が 74 名、「高群」が 64 名である。自己主張尺度の得点の 19 項目の平均値が最小値から 2.46 までを「自己主張低群」、2.47 から 2.83 までを「自己主張中群」、2.84 から最大値までを「自己主張高群」とした。

自己主張尺度の平均値が高い群は低い群と比べてどの対象に対して主張する傾向が高いのか、また、どの下位カテゴリーにおいて主張する傾向が高いのかを見た。表 7 に示したように、「自己主張高群」は「自己主張低群」と比較していずれの対象や下位カテゴリーにおいても、0.1%の水準で有意に高い。「自己主張高群」はいずれか特定の対象やカテゴリーにおいて主張が強いのではなく、どの対象や下位カテゴリーにおいても万遍なく「自己主張低群」より主張する傾向が見られる。

表7 自己主張の高低と下位カテゴリー・対象別比較

	自己主張低群	自己主張高群	t 値	
一般	1.82	2.79	-18.66	***
親	2.93	3.34	-3.78	***
友人	2.68	3.25	-11.11	***
権威	1.66	2.98	-13.37	***
Positive Assertiveness	2.92	3.44	-7.01	***
Negative Assertiveness	2.21	2.94	-14.87	***
Self-Affirmation	1.70	2.97	-17.40	***

***p.001

7) 自己認識尺度の因子分析

本研究の自己認識尺度を作成するもととなった柏木ほか(2003)の「個人としての自己実現」は下位尺度として 3 因子が抽出されている。第 1 因子;不安・焦燥, 第 2 因子;自己依拠, 第 3 因子;集団志向 である。同じく、梶田(1988)の「自己成長性」の 4 因子は 第 1 因子;達成動機 第 2 因子;努力主義 第 3 因子;自信と自己受容, 第 4 因子;他者のまなざしの意識 である。いずれの尺度も、自己意識と他者意識が織り込まれた自己像の発達を測っている。この中から、因子負荷量の高いものや大学生の自己認識の様相を測るのに重要であると思われるものを合計 26 項目選び出した。

本研究ではこの 26 項目について主因子法プロマックス回転による因子分析を行ない、4 つの因子を抽出した。第 1 因子を 不安・焦燥 ，第 2 因子を 自我の強さ ，第 3 因子を 他者依拠性 ，第 4 因子を 努力主義 と命名する(表 8 参照)。因子負荷量が 0.35 以下である項目 3, 13, 20, 21 を除く 22 項目から成る。アルファ係数は第 1 因子が 0.84, 第 2 因子が 0.79, 第 3 因子が 0.71, 第 4 因子が 0.64, 累積寄与率が 45% である。

また、4 因子の相互相関を表 9 に示した。第 1 因子;不安・焦燥 は 第 3 因子;他者依拠性 と正の相関があり、第 2 因子;自我の強さ と負の相関がある。第 2 因子;自我の強さ は 第 4 因子;努力主義 とは正の相関があり、第 3 因子;他者依拠性 とは負の相関が見られる。

表 8 自己認識尺度の 4 因子

	負荷量				
	不安・焦燥	自我の強さ	他者依拠性	努力主義	
23. 自分の人生はこのままでいいのかと不安になる	0.816	-0.275	0.337	0.060	
9. 今のままの自分ではいけないと思うことがよくある	0.708	-0.029	0.361	0.079	
不安・焦燥 7. ときどき自分自身がいやになることがある	0.687	-0.213	0.386	-0.066	
15. 自分が本当にやりたいことをやっていないという不安や焦りを感じる	0.662	-0.048	0.286	0.101	
24. 現在の自分に満足している	-0.618	0.253	-0.099	0.132	
19. 自分が本当に何をやりたいかわからない	0.559	-0.388	0.149	-0.050	
14. 他の人をとてもうらやましく思うことがよくある	0.558	-0.164	0.478	0.143	
5. 自分を頼りないと思うことがよくある	0.552	-0.234	0.395	-0.161	
22. 周りとは反対でも、自分が正しいと思うことは主張できる	-0.311	0.674	-0.378	0.005	
18. 自分がやりたいと思ったことは周囲の人に反対されてもする	-0.142	0.633	-0.171	0.095	
自我の強さ 16. 自分の信念に基づいて生きている	-0.369	0.627	-0.216	0.156	
4. 他人にはやれないようなことをやり遂げたい	-0.029	0.596	0.066	0.336	
12. 自分の能力を最大限に伸ばせるよう、いろいろなことをやってみたい	-0.002	0.593	0.086	0.299	
26. 自分の個性を活かそうと努めている	-0.216	0.569	0.008	0.230	
6. 他人に認められなくても、自分の目標に向かって努力したい	-0.059	0.493	-0.124	0.352	
他者依拠性 2. 他人からどんなうわさをされているか気になる方である	0.337	-0.208	0.695	0.072	
17. 周囲の人と違うとなんとなく不安になる	0.333	-0.488	0.641	0.271	
8. 自分が少しでも人からよく見られたいと思うことが多い	0.196	0.057	0.636	0.051	
11. 何かしようとするとき他の人が反対するのではないかと心配になる	0.445	-0.269	0.528	0.183	
努力主義 1. 一度自分で決めたことは途中でいやになってもやり通すよう努力する	-0.171	0.250	-0.090	0.718	
10. 何でも手がけたことには最善を尽くしたい	-0.028	0.369	0.074	0.613	
25. 将来立派な仕事をしたい	0.021	0.205	0.274	0.489	
	累積寄与率	45%			
	係数	0.84	0.79	0.71	0.64

表 9 因子間相関

	不安・焦燥	自我の強さ	他者依拠性	努力主義
不安・焦燥	1	-.255 ***	.440 ***	-.096
自我の強さ	-.255 ***	1	-.255 ***	.391 ***
他者依拠性	.440 ***	-.255 ***	1	.067
努力主義	-.096	.391 ***	.067	1

*** p<.001

8) 自己主張尺度と自己認識尺度の相互相関

自己主張尺度の各対象・下位カテゴリーと自己認識尺度の4因子の相関を見た。自己認識尺度の不安・焦燥はどの対象・カテゴリーについてもマイナスに作用し、自我の強さはどの対象・カテゴリーについてもプラスに作用する。同様に他者依拠性はマイナスに、努力主義はプラスに作用するが、両方の因子とも「親」への自己主張には作用しない。

表10 自己主張尺度と自己認識尺度の相互相関

自己主張対象・下位カテゴリー	自己認識4因子			
	不安・焦燥	自我の強さ	他者依拠性	努力主義
一般	-0.329 ***	0.360 ***	-0.313 ***	0.218 **
親	-0.182 **	0.190 **	-0.063	0.095
友人	-0.254 ***	0.357 ***	-0.238 **	0.159 *
権威	-0.299 ***	0.473 ***	-0.332 ***	0.229 **
Positive Assertiveness	-0.154 *	0.225 **	-0.173 *	0.186 **
Negative Assertiveness	-0.309 ***	0.397 ***	-0.269 ***	0.164 *
Self-Affirmation	-0.352 ***	0.435 ***	-0.340 ***	0.236 **

*p<.05, **p<.01, ***p.001

9) 自己主張の高さと自己認識尺度4因子とのかかわり

先に提示した「自己主張高群」と「自己主張低群」の2群間で、自己認識尺度4因子のT検定を行なった。表11に示したように、第1因子;不安・焦燥と第3因子;他者依拠性は「自己主張高群」の方が「自己主張低群」と比べて有意に低い傾向にあり、逆に、第2因子;自我の強さと第4因子;努力主義については、「自己主張高群」の方が「自己主張低群」と比べて、有意に高い傾向にあった。

不安・焦燥が低い方が自己主張が高くなるという結果は古市(1993)の自信・自己信頼感の欠如や自己評価の低さが主張性の低さにつながるという報告と一致する。また、他者依拠性が低い方が自己主張が高くなるという結果は、佐藤(1996)の母親が人の目を過剰に意識することが子どもの自己主張の発達にマイナスの影響があるという報告と一致する。

表11 自己主張の高さと自己認識尺度4因子のT検定

		自己主張 低群		自己主張 高群	T値
	N	63		64	
<不安・焦燥>	Mean	3.41	>	2.76	6.58 ***
	SD	0.47		0.62	
<自我の強さ>	Mean	2.75	<	3.40	- 7.90 ***
	SD	0.50		0.41	
<他者依拠性>	Mean	3.34	>	2.78	5.34 ***
	SD	0.46		0.69	
<努力主義>	Mean	3.05	<	3.35	- 2.94 **
	SD	0.60		0.54	

p<.01, *p.001

10) 自己主張のタイプと自己認識尺度

ここで先の自己主張のタイプ(表6参照)と自己認識尺度の4因子とのかかりを見る。表12に示したように対象によって主張のレベルが変動しない「Dタイプ」は第1因子;不安・焦燥がほかの3つのタイプと比べて有意に低い。「Dタイプ」と、あまり自己主張しない「Aタイプ」の有意差は0.1%水準であり、「Dタイプ」と親・友人への主張が高い「Cタイプ」の有意差は1%水準である。「Dタイプ」と一般・権威への主張が高い「Bタイプ」の有意差は5%水準である。つまり不安・焦燥が低いことと、一般・権威への自己主張には明らかに関連が見られる。また、どの対象に対してもあまり主張しないAタイプは自我の強さが他の3つのタイプと比較して有意に低い。

他者依拠性については「Cタイプ」が「Bタイプ」より有意に高いことが興味深い。親・友人への自己主張は他者依拠性、つまり依存心と関連がある可能性がある。自己主張のタイプと努力主義との間にはかかわりが見られなかった。

表12 自己主張の対象別タイプと自己認識尺度4因子の分散分析

タイプ	Aタイプ Bタイプ Cタイプ Dタイプ				分散分析 F値	多重比較	
	どの対象 に対して もあまり主 張しない	一般・権 威により 主張する	親・友人 により主 張する	対象が誰 であって も主張す る			
自己認識	N	29名	59名	61名	29名		
<不安・焦燥>	Mean	3.36	3.06	3.18	2.67	8.23 ***	Aタイプ > *** Bタイプ > Dタイプ * Cタイプ > **
	SD	0.53	0.57	0.54	0.62		
<自我の強さ>	Mean	2.58	3.16	2.99	3.29	12.90 ***	< Bタイプ *** Aタイプ < Cタイプ ** < Dタイプ *** Cタイプ < Dタイプ *
	SD	0.45	0.50	0.48	0.47		
<他者依拠性>	Mean	3.36	2.86	3.18	2.85	6.94 ***	Aタイプ > Bタイプ ** > Dタイプ ** Bタイプ < Cタイプ *
	SD	0.42	0.66	0.52	0.66		
<努力主義>	Mean	3.15	3.28	3.10	3.29	1.31 n.s.	
	SD	0.61	0.57	0.56	0.55		

*p<.05, **p<.01, ***p.001

11) 自己肯定群・否定群と自己認識尺度 4 因子の T 検定

さらに、自分に主張行動が多かったりすくなかったりすることをどう捉えているかを、「とてもよい」「ややよい」「あまりよくない」「よくない」の 4 段階で回答を求めた結果から、19 問中何問について「あまりよくない」「よくない」と否定的な回答したかにより、「自己肯定群」と「自己否定群」を選び出した。その内訳は、19 問中否定的に捉えた回答が 5 問以下の 61 名を肯定群、9 問以上否定的に捉えた回答がある 66 名を否定群とした。その他は 66 名で 2 群の中間に落ちた。

自己認識尺度の 4 因子について「自己肯定群」と「自己否定群」の間で T 検定を行なったところ、表 13 に示したように、第 1 因子;不安・焦燥 第 3 因子;他者依拠性 については、「自己否定群」の方が「自己肯定群」と比較して有意に高く、第 2 因子;自我の強さ、第 4 因子;努力主義 については「自己肯定群」の方が「自己否定群」と比較して有意に高い。

表13 自己肯定群・自己否定群と4因子のT検定

		肯定群		否定群		T検定 t 値
		N	61	66		
<不安・焦燥>	Mean	2.72	<	3.38	7.12***	
	S.D.	0.60		0.43		
<自我の強さ>	Mean	3.35	>	2.71	7.19***	
	S.D.	0.52		0.49		
<他者依拠性>	Mean	2.76	<	3.25	4.55***	
	S.D.	0.67		0.54		
<努力主義>	Mean	3.33	>	3.07	2.65**	
	S.D.	0.59		0.55		

** p<.01 ***p<.001

12) 自己主張への価値態度と自己の発達

ここで、被験者を平均値ではなく、主張行動が(よくある・多いほう)と答えた回数により、主張の多い層、中間層、少ない層に分けた。この主張の多寡と、自己肯定群・否定群のクロス表により、主張行動が少なく肯定的に自己評価する群(A群)、主張行動が多く否定的に自己評価する群(D群)、主張行動が多く肯定的に自己評価する群(B群)、主張行動が少なく否定的に自己評価する群(C群)を抜き出した(表 14 参照)。このなかで、A 群と D 群は自己主張することをあまり重視していないと判断し、B 群と C 群は自己主張することを重視していると判断した。自己主張重視低群(A・D 群)と自己主張重視高群(B・C 群)の間で、自己認識尺度の下位カテゴリーごとに T 検定を行なった。しかしながら表 15 に示したように、2 群間に有意な差は認められなかった。このことから、自己主張を重視する価値態度と自己認識の間にかかわりは見出されなかったといえる。

前述の「自己肯定群」と「自己否定群」の間には自己認識尺度の各下位カテゴリーで有意差が見られたことから(表 13 参照)、自己主張に価値を見出しているか否かより、自分の自己主張行動の多い少ないに拘わらず自己の行動を高く評価していることが自己認識と関わっていることを示唆している。

表 14 主張の多寡と、自己肯定群・否定群のクロス表

	主張少ない群		主張多い群		合計		主張少ない群		主張多い群	
自己肯定群	17	(11.1%)	33	(21.7%)	50	(32.8%)	自己肯定群	A	B	
自己否定群	31	(20.4%)	21	(13.8%)	52	(34.2%)	自己否定群	C	D	
合計	70	(49.3%)	77	(50.7%)	152	(100%)				

表 15 自己主張重視低群 (AD 群), 自己主張重視高群 (BC 群) と 4 因子の T 検定

	自己主張	Mean	SD	t 値	
< 不安・焦燥 >	重視低群 (AD群)	3.02	.65	-.437	n.s.
	重視高群 (BC群)	3.08	.59		
< 自我の強さ >	重視低群 (AD群)	3.02	.59	-.279	n.s.
	重視高群 (BC群)	3.05	.61		
< 他者依拠性 >	重視低群 (AD群)	3.01	.68	-.327	n.s.
	重視高群 (BC群)	3.06	.65		
< 努力主義 >	重視低群 (AD群)	3.25	.70	-.282	n.s.
	重視高群 (BC群)	3.21	.53		

13) 自己主張尺度総合点と自己認識尺度下位カテゴリー(4 因子)との関連

自己主張と自己認識の発達の間についてもう少し深く探るため、重回帰分析を行なった。自己主張尺度総合点を基準変数、自己認識尺度の下位カテゴリー得点を説明変数として、重回帰分析を行なった。重回帰分析の手法としては、線型、強制投入法を用いた。分析結果については、重相関係数、決定係数、各変数ごとの標準偏回帰係数を示した。表 16 に示したように、重相関係数は 0.6 を越え、決定係数も 0.368 となった。次に変数ごとの標準偏回帰係数を見ると、主張性総合点に 第 2 因子; 自我の強さ はプラスに有意であり、第 1 因子; 不安・焦燥 と 第 3 因子; 他者依拠性 はマイナスに有意であった。主張性総合点と 第 4 因子; 努力主義 との間には有意な差は見られなかった。

表 16 : 自己主張尺度総合点に関連する自己認識尺度 4 因子の重回帰分析結果

	自己主張尺度総合点
不安・焦燥	-.218**
自我の強さ	.360***
他者依拠性	-.184 **
努力主義	.113 n.s.
重相関係数 (R)	.606 ***
決定変数 (R ²)	.368

ま と め

本研究のデータ分析から、大学生の自己主張と自己認識の発達の間には、予想以上に強いかわりが見出された。自己主張は、不安や依存心が少ないことや強い自我の発達を自分で認識していることと密接な関連があった。

自己主張の研究については、性格特性やパーソナリティなどある程度固定的で内的な条件とのかかわりに加え、自己主張する対象や内容など、変動的で外的な条件とのかかわりの観点からも研究されてきた。本研究はこの性格特性やパーソナリティが、対象や内容などの異なる状況によって自己主張

が変動するか否かに深く関連していることを示唆している。

また、自己主張の対象や下位カテゴリーの性差分析からは Positive Assertiveness については女性の方が男性より優位に発達していること、またその一方で権威に対しては男性の方が女性より優位に発達していることが明らかになった。

自己主張は、自分の考えや感情を適切に表現できるソーシャルスキルであるが、それはやはり自分らしさ、アイデンティティの確立につながる「自己証明」のプロセスでもある(柴橋 2004)。人と違う自分の考えを表現すること、自尊心を守ること、人との間に適切な心理的距離を持ち自分らしさを大切にすることと自己主張の発達は深く関連している。

自己主張をするには自己の判断が伴う。対人関係において自分はどうか考え、決定し、行動する。このような心理的プロセスは自己意識を鮮明にし、自己と他者の心理的距離を適切に測り、自分らしさの模索を促す。対人行動において主張が可能になることは肯定的な自己評価を増やしていくことであろうし、またその結果他者との相互交渉において主張的な自分を打ち出すことを可能にするという相互作用が自己主張の発達と自己認識の間にあると思われる。

今回の調査結果が示唆することは、自己主張が他者と折り合うためのソーシャルスキルだけではなく、自己証明を可能にする手段であるということである。であるからこそ、アメリカの教育で、自己主張しないことは集団の中に自己を埋没させ自分を見失うことという受け止め方があるのだろう。日本の子どもの自己主張の発達がアメリカやイギリスの子ども達と比較して遅れ気味であることはこれまでも指摘されて来た(佐藤 2001)。自己主張と自己認識との間にこれだけ密接な関連があるとすれば、今後子どもの自己主張を長期的に教育環境の中で育むことは自己形成のプロセスにおいて極めて重要な発達課題であると思われる。

なお、本研究は現在も男子学生のデータを収集しており、男女の人数のバランスがよくなったところでいずれ性差についてより詳細に検討したい。

引用文献

- 古市裕一・乗金恵子・原田雅寿．(1991)．主張性検査の開発(1)．*岡山大学教育学部研究集録*, 86, pp.33-43.
- 古市裕一．(1993)．主張性検査開発の試み．*こころの健康*, Vol.8, No.2, pp.87-93.
- 古市裕一．(1995)．児童用主張性検査の開発．*こころの健康*, Vol.10, No.2, pp.69-76.
- Galassi, J.P., DeLo, J.S., Galassi, M.D. & Bastien, S. (1974). The College Self-Expression Scale, *Behavior Therapy*, 5, pp.165-171.
- 濱口佳和．(1994)．児童用主張性尺度の構成．*教育心理学研究*, 第42巻 第4号, pp.101-108.
- 埴朋子．(1999)．関係性に応じた情動表出：児童期における発達の变化．*教育心理学研究*, 第47巻, pp.273 - 282.
- 平木典子．(1989)．*アサーションとは？ - さわやかな自己表現のために -*．東京：金子書房．
- 平木典子．(1993)．*アサーション・トレーニング - さわやかな自己表現のために -*．東京：金子書房．

- 柏木恵子. (1988). *幼児期における「自己」の発達* 東京：東京大学出版会.
- 柏木恵子・田島信元・氏家達夫. (1986) 幼児の self-regulation の発達(). 研究の構想・目的・方法. 日本心理学会論集, p.506.
- 柏木恵子ほか. (2003) 社会変動・家族・個人の発達に関する発達・文化心理学的研究：「関係性」「個人化」の文化間及び文化内比較―，平成 12 年度～14 年度科学研究費（基礎研究(B)(1)）研究報告書
- 梶田叡一. (1988). *自己意識の心理学* 東京：東京大学出版会.
- 佐藤淑子. (1996). 幼児の社会的場面における自己制御機能の発達に関わる母親のしつけ. *家庭教育研究所紀要*, 18 巻, pp.131-140.
- 佐藤淑子. (1997). 女子青年の対人場面における自己主張. *発達研究* 12 号, pp.28-36.
- 佐藤淑子. (2001). *イギリスのいい子 日本のいい子* 中公新書 東京：中央公論新社.
- 柴橋祐子. (2004). *青年期の自己表明に関する研究* 東京：風間書房.
- 竹尾和子. (2002). 状況と個人の関係から捉えた自己主張, 学位論文 未発表
- 内田伸子. (1989). *幼児心理学への招待*. 東京：サイエンス社.
- Wilson, K. and Gallois, C., (1993). *Assertion and Its Social Context*, Pergamon Press.
- Wright, F.A., 1983, Effects on Assertiveness Training on Older Adult's identity maintenance and control of interpersonal environment, Ph.D. thesis, Texas A & M University.
- 山本愛子. (1995). 幼児の自己主張と対人関係-対人葛藤場面における仲間との親密性及び既知性. *心理学研究*. 第 66 巻, 第 3 号, pp.205-212.

< 付 記 >

本研究のデータ分析にあたり，貴重なご助言を賜りました文京学院大学の柏木恵子教授に心より感謝申し上げます。また，文京学院大学の田矢幸江さん，原山泉さんの協力をいただいた。ここに謝意を表します。

